



# 教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1995 発行所 財団法人精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町1-2-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

## 生命を与える霊

(ローマ市内の教会でのミサの説教。召し出しという不思議について、教皇様は原稿なしにその場でお話しになった。)

いま読まれた福音書から、また聖パウロの手紙から、神の言葉は私たちに語りかけています。これら啓示されたみ言葉を聞いて、心動かさずいられますでしょうか。神は少年サムエルを何度も繰り返し呼びました。「サムエル、サムエル」：ここには深い意味があります。同じことが、同じ奇跡がペトロと兄弟アンドレアにも、ゼベデオの子らにも起こりました。召し出しという奇跡です。今日は召し出しについて考えてみましょう。使徒として、司

祭、修道者としての召し出しのみならず、キリスト信者としての召し出しが意味すること、信者の召し出し、教区の一員としての召し出しについて。(…)

教区の一員であること、この共同体の中でキリスト信者であることは、何を意味するのでしょうか？

この素朴な問いかけに答える前に、聖パウロの手紙を注意深く読み直す必要があります。手紙の中でパウロは私たち一人ひとりに語りかけています。私たちはそれぞれ一人の男性、女性として共同体をなしています。そこには聖霊がお住まいになるのです。これこそ私たちのキリスト信者の召命の源です。

聖三位一体が、聖霊の神的な介入によって住まわれるという秘義から召し出しが生じます。聖霊は今も私たちの心の中で働き、男性として、女性として、息子、妻として、父母として、息子、娘として、若者、老人としての尊厳を思い出させてくれます。全ては私たちのうちに住み、神において成長させてくださる聖霊へと向かうのです。

召命はこの世限りのものではありません。教会の秘義、教区の秘義は、消えることのない永遠の町の市民となるよう、私たちに呼びかけ、急ぎ立てていきます。つまり私たちはここローマの町で、聖ペトロとパウロが生命を捧げたこの使徒の町で、キリストと共に市民なのです。私たちはローマ市民として、使徒と同じ町の住人、キリストの隣人でもあります。キリストはローマ市民になられたと同時にペトレヘムの、ナザレトの、エ

ルサレムの、そして全世界の住人でもあられるからです。キリストはあらゆる町の住人となられたからです。(…)

キリストは、ご自分の民のいる所、たとえ知られぬままであろうと聖霊が働き、人々を神の秘義へと導く所ならどこにでもお住まいになります。キリストはどこにでもおられます。そこ

## 神は人間の弱さを知り給う

いま私たちはバチカンの庭園内にあるルルドの洞窟の前で、聖母を囲み聖体祭儀を捧げています。神の慈しみの御母マリアを称えようと、集まってきたのです。本日の典礼は(…)私たちの注意を罪の現実と満ちあふれる神の憐れみへと引き寄せます。「私は：キリストと共に十字架に付けられた。私は生きているが、もう私ではなくキリストが私のうちに生きたもうのである。私は肉体をもって生きているが、私を愛し、私のためにご自身を渡された神の子への信仰の中に生きています。」(ガラツィア2・20)

聖パウロのこの言葉は人生の

に住み、ご自分の肢体、すなわち教会に生命をお与えになります。だからこそ、聖霊が教会と私たちの内に住まうのです。

私はこの真理を皆さんに、心からあふれ出たままの言葉で手短かにお伝えしました。それは、本日の聖書の言葉に深く心を動かされたからなのです。(…)

(九四・一・十六)

真の意味を超越の秘義という光のもとに照らして私たちに示します。神のみことばであるキリスト、救いの真理を明かし、人類をあげなうため人となられた御方への信仰を抱いて、地上の生涯を過ごさねばなりません。

第一朗読でダビデ王とウリアの妻の話を読み、続いてルカ福音書の感動的な「罪の女」の物語を読みました。悔い改め、赦しを願いつつ、神である師への敬意を行動に表わした彼女の姿は、私たちが罪の現実と呼び覚悟を悔辱する行為です。

罪を否定することができましょうか？ 教会は「個人的な

「罪」があることを教え続けてきました。聖パウロはキリストの教えを引いてコリント人に書き送っています。思い誤るな、道徳の掟を守らず、罪にとどまる人々は「神の国を継がない。」（1コリント6・9、10）

とは言え、啓示の示すところによれば、神は人間の弱さをご存じであり、いつでも赦してくださるのです。ほっとするではありませんか。神は愛と憐れみ

（ルカ7・47、50） イエズスは神としての權威をもって罪の赦しを約束しますが、同時に悔悛と改心を要求されます。兄弟姉妹の皆さん、神の優しさと慈しみへの信頼を失わないでください。悔い改め、もう罪を犯すまいと決心するかぎり、神が赦してください。さらい罪はありませぬ。マグダラのマリヤの悔悛とイエズスがシモンに語ったたとえ話は、これについて示

唆するところ大です。悪は断固として断罪すべきですが、罪人に対しては理解と忍耐が必要です。このように典札は、真理と憐れみ、赦しと喜びを広めよと呼びかけています。私たちは聖母の記念であるルルドの洞窟に集まっています。聖ベルナデッタは罪をこう定義しました。「罪人とは罪を愛する人のことです。」聖母に招かれ、言葉を交わし、病を癒して

あげようと言われたベルナデッタは答えました。「ルルドは私のためのものではありません。貧しい罪人たちのものです！」聖マリヤ、罪人たちを助けたまえ。皆さん、限りない愛と憐れみで子供たちを待つ神に、絶えざる信頼を保ち続けることができるよう、祈りましょう。「幸せなのは罪がゆるされ、過ちがおおわれた者。」（詩篇32・1）（九五・六・十八）

## イエズスの生涯は

### 信徒の模範

教会シリーズ 28

1 信徒の在俗性を単に「この世」という観点からのみ捉えることはできません。なぜなら教会という救いの共同体における神と人間の関係が、そこにはあるからです。キリスト者にとって信徒の身分は、人間を神の養子とし、キリストの神秘体である教会の一員とする洗礼の秘跡から生じるものですから、卓越した価値があります。

2 教会内で活発かつ積極的信徒という構成員は、教会が全ての人に開かれることを望んだイエズス・キリストの意向から生まれました。イエズスの興味深いたとえ話に登場するぶどう畑の主人の行動を思い出してみてください。主人は仕事のな

この呼びかけが注目されました。「信徒の召命と使命」2番）「主イエズスの呼びかけは、その時以来絶えず続いています。イエズスはこの世に生を受けたすべての人に呼びかけているのです。…この呼びかけに対する応えを、司教、司祭、修道者といった人たちにだけにまかせようなどということがあってはなりません。この呼びかけは全ての人に向けられているからです。すなわち、信徒もまた一人ひとり主から呼びかけられ、教会のため、世界のために使命を与えられているのです。」一人ひとりが「神と和睦してとどまる」（IIコリント5・20）よう、救われるよう、世の救いのため共に働くよう招かれています。神は「全ての人が救われることを望まれる」（Iティモテオ2・

4）からです。御父の「ぶどう畑」で各自が特質を活かして働くよう招かれています。一人ひとりに場と報酬があります。3 信徒は教会の生命にあずかることによつて、キリストご自身との親密な交わりに入るよう召かれています。それは神の賜ですが、同時に義務も伴います。イエズスは弟子たちにもいつもイエズスと共に、イエズスのうちに一つであれと命じ、命への情熱を弟子たちの精神と心に染み透らせなかつたでしようか。「私にとどまれ。私があなたたちにとどまっていますように。私がいないとあなたたちには何一つできぬからである。」（ヨハネ15・4、5）

使命を果たすには恩寵が必要「私がいけないとあなたたちには何もできない」とは、キリストなしには個人の才能や特質をこの世の事柄において活かせるかという意味ではありませんが、ヨハネの伝えるイエズスのこの言葉は、キリストによらずにキリスト信者としての最良の實りを生み出すことはできないのだと私たち皆に、司祭と信徒全員に警告しています。特に信徒にとって実りとは、恩寵の力でこの世を刷新し、より良い社会を築くために貢献することです。恩寵への道は忠実な人に開かれています。家族の務めを果たすこと、特に子供を育てること、どんな形、どんなレベルであれ自らの仕事を通じて正義と愛と平和のため社会に奉仕する

霊的読書のためのテープ・コレクシオン…「折り方」、「神の現存」（フランシスコ・ルナ著）「十字架の道行き」、「聖性を目指して」、「マリアを通してイエズスへ」（ホセマリヤ・エスクリバー著）各カセット1巻

「十字架の道行き」、「聖性を目指して」、「マリアを通してイエズスへ」（ホセマリヤ・エスクリバー著）各カセット1巻

「十字架の道行き」、「聖性を目指して」、「マリアを通してイエズスへ」（ホセマリヤ・エスクリバー著）各カセット1巻

「十字架の道行き」、「聖性を目指して」、「マリアを通してイエズスへ」（ホセマリヤ・エスクリバー著）各カセット1巻

「十字架の道行き」、「聖性を目指して」、「マリアを通してイエズスへ」（ホセマリヤ・エスクリバー著）各カセット1巻

★お申し込み・お問い合わせは精道教育促進協会まで。

ことも、恩寵への道なのです。

4 (…) 恩寵の状態にない

くても「良い仕事」はできるが (DS 157 参照) 恩寵だけが仕事に救いの価値を与えることができる (DS 151) トリエント公会議は教えます。ピオ五世は「未信者の行為はすべて罪であり、(異教徒の) 哲学者の諸徳は悪である」 (DS 1925) と主張する人々の意見を非難し、自然主義と法律万能主義を否定し、神の養子の心に恩寵を注がれる聖霊から価値ある救いの善が生まれると説明しています。 (DS 1915)

「人間は恩寵がなくても善を望み、なすことができるか」という問いに、聖トマス・アクイナスは答えています。「人間の本性すべてが罪によって墮落したわけではないので、すべての善をなすことはできないとは言え、病気の人が健康な人のような動きはできなくても、一人である程度の動きをなすことができるように、墮落した本性の状態であっても、天賦の才能によって、住居を建てたり、ぶどうを育てたり、科学や経済の仕事の領域で活動したり、ある種の善をなすことはできる。しかし…」 (『神学大全』II:q.109, P.2) 注入された徳と恩寵による愛の働きである、より高い超

自然の善を行うことはできない。(前掲書参照)

5 信徒は在俗という身分を

通して託身の秘義に一致することができません。事実、神の御子は人間の一人となることを望み、罪を除いて全てにおいて、私たちのようになられませんでした。(ヘブライ2・17、4・15) (…) 福音は、永遠の御子が私たちと同じ条件を受け入れ、この世の生活において自己の奉獻を実現されたと言語ります。地上でのイエズスの人間としての生活は、洗礼を受けた全ての人を導き、鼓舞する模範です。(現代世界憲章32番参照)

6 人間としての普通の生活

を選んだ神の御子は、地上の生活に新しい価値を与え、神的高みにまで上げてくださいました。(聖トマス・アクイナス『神学大全』III:q.40, ad.12) 神である御子は、人間の最も小さな行ないをも神の命にあずかるまでに高められました。

(…) キリストは人間として生まれ、私たちと同じように生活し、誰もがするように食べ、飲み、働かれました。こうして三位一体の命の秘義が生活のあらゆる面に反映し、人間の活動がより高いレベルにまで高められました。信徒として信仰のうち

に生きる人にとって、託身の秘義がこの世の活動に浸透し、それを恩寵で満たします。信仰の光に照らされて、私たちを贖う託身の道理に従う信徒も、十字架による救いの秘義にあずかります。キリストの生涯

復活された主が弟子たちにかけた言葉「平安あれ」をもって若い友人の皆さんにごあいさつします。

ローマを發たれるに当たり、三つの言葉をお国へ持ち帰ってもらえればと思えます。三つの言葉とは、

探し求める、愛する、証しする、です。忘れないでください。

まず、イエズスを探すこと。皆さんと共におられるイエズスを探し求め、さらにくわしく知ろうと努めること。ためらわず、皆さん自身のことをイエズスにお伝えするのです。自らの疑問や恐れを主に話してください。人生の本当の意味、

において託身と贖いは一つの愛の秘義となりました。神の御子はご自身の犠牲を通して人間を救うために人となられたのです。「人の子が来たのは仕えられるためではなくて仕えるためであり、多くの人のあがないとして自分の命を与えるためである。」(マルコ10・45、マテオ20・28)

御子は罪以外全てにおいて私たちと同じになられたとヘブライ人への手紙が伝える時、地上の生活における苦しい試練も体験されたことが語られています。

この世での皆さんの使命を主に内に見出すことができるでしょう。

次に、イエズスを愛すること。祈りの中で自分をイエズスに捧げ、秘跡の内にイエズスを

受け、信者の集まりで礼拝すること。キリストの愛には、愛をもって応えましょう。それは聖書と教会の教えを通して伝えられる、キリストからの語りかけにお答えすることでもありません。キリストの愛は皆さんの心

す。(4・15参照) また、フィリッピン人への手紙は人間に似た者となったキリストが、十字架の上に死ぬまで従われたことを記しています。(2・7、8参照)

キリストの生涯のご苦難が十字架上で頂点に達したように、信徒の生活における日々の試練は、死を征服されたキリストの死に一致する時、頂点に達します。キリストにおいて、またキリストに従う全ての司祭と信徒において、十字架は救いの鍵なのです。(九三・十一・十)

の奥にある願いをかなえ、霊的な成長を遂げさせてくれるでしょう。

最後に、イエズスを証しすること。イエズスに確固たる希望を置き、行いと言葉で勇敢にこの希望を人々に伝えてください。

若者たちへ…  
三つの大切なこと  
最後に、イエズスを証しすること。イエズスに確固たる希望を置き、行いと言葉で勇敢にこの希望を人々に伝えてください。家族の中で、友人たちの間で、そして人生を通じて出会う全ての人々の前で、キリストに奉仕してください。

若い友人たち、主が約束された平安が、皆さんの心を満たしてくれましょう。御家族の方々にもよろしく。主イエズスの喜びと力が皆さんに与えられるよう、私からの使徒の祝福を送ります。(九五・四・二二)

# 不変の教え

## 大切な良心の役割

(ポーランドご訪問の野外ミサにて)

(…)兄弟姉妹の皆さん、殉教者の残した証しは、私たちにとっては常に挑戦状のようなものです。正面から向き合い、考察することを迫られます。良心の声に背くよりは死を選んだ人間を見て、称賛する人もいれば嫌悪を覚える人もいますでしょうが、無関心ということはありません。殉教者の姿は私たちに多くのことを語ってくれますが、中でも最も肝心なことは私たちの良心の状態がどうかであるか、全ての人が自らの良心に忠実であるかどうかを問われているということなのです。

良心は真理に基づくべき良心…。第二バチカン公会議は、良心を「人間の最奥であり聖所」と呼び、「人間は良心の奥底に法を見出す。この法は人間が自らに課したものではなく、人間が従わなければならないものである。この法の声は、常に善を愛して行い、悪を避けるよう勧め、必要に際しては「これを行え、あれを避けよ」と心の耳に告げる」(現代世界憲章、16番)と述べています。

この一節からわかるように、良心は全ての人にとって必要不可欠です。良心は内的な案内役であり、行動の審判者です。良心が正しく、真理に基づいて判断し、善を善、悪を悪と言いつつ、使徒の言葉を借りれば「神のみ旨は何か、良いこと、嘉せられること、完全なことは何かをわきまえ知る」(ローマ12・2)ことは非常に大切です。(…)

良心の人であるためには、まず何よりもどんな状況においても自らの良心に従うこと、たとえ厳しく、要求が大きすぎると思える時でも内なる声に耳を傾けることです。善のために働き、自分の内に、自分の周囲に善をいや増し、悪におちいらぬことです。聖パウロが言うように、「悪に勝たれるままにせず、善をもって悪に勝つ」(ローマ12・21)のです。良心の人であるとは、家庭の中で、各自が住まう共同体の中で、また祖国全体で、神の国(真理と生命と正義と愛と平和の国)建設を目指すことです。また、勇気をもって公的責任を負い、共通善を心につけ、隣人の不幸や困窮

に目を閉ざさず、福音的連帯の精神で「互いに重荷を負う」(ガラティヤ6・2)ことです。(…)

この二十世紀は、特に人間の良心が踏みじられた時代でした。全体主義思想の名のもとに多くの人々が心の奥の信念に反して行動せざるを得なかったのです。ことに中央・東ヨーロッパの人々は辛い経験をしました。この時代を私たちは良心が圧迫され、人間の尊厳が退けられ、罪もない多くの人が信念に忠実であろうとしたために苦しめられた時代として思い返します。その困難な時代に、信者たちの利益のためにだけでなく、良心の権利を守った教会のめざましい役割を思い起こします。当時、私たちは自問したものを

●7・26 水曜日的一般謁見にて。「教会一致運動は信者の基本的な心構えとして愛の心、教会への忠実、浄化と刷新に対する真剣な望みを要求します。」「教会に属する全ての人々が一致を守り、研究、対話、比較を通じ、主イエズス・キリストへの信仰を同じくする全ての人と協力することができまますように。」

●8・2 「キリストが望まれたような真の教会一致に至るに

です。良心に逆らって歴史は進めるだろうか? そのためにはどんな代償を支払うのだろうか? 私は再び問いかけます。どんな代償を? それは不幸にも国家の道徳心に負わされた深い傷でした。傷口は閉じず、癒えるまでにまだ長い時間がかかるでしょう。

良心の大きいなる試練の時であつたあの時代を忘れてはなりません。私たちにとっては何にも増して時機に合った警告であり、目覚めて注意しているように、道徳的放任主義の風潮に飲み込まれまますように。福音の教えと神の掟は自由を与えるという事実に基づきますように。物事を決める時には「よし全世界をもうけても、自分の命を失

は天の恩寵が不可欠です。どんな時でも、一致の賜を求めて集うキリストの弟子たちの願いを神はお喜びになります。」

## 教皇様の動き

●9・2 お告げの祈りの時に。「教会生活において、女性の前には数々の可能性が開かれています。思うに、女性の活動の場は神学の教授、祭壇の周辺

えばそれが何の役に立とう。人はその命を何と取り換えられよう」(マルコ8・36・37)というキリストの警告を心にかけることができますように。

状況はともあれ、良心の権利は今日なお守る必要があります。寛容の名を借りて、おそらくかつてないほどの不寛容が公的生活やマスメディアの間で広まっているからです。信者としては残念ながらそれを認めざるを得ません。社会の生命から信仰を遠ざけようとする傾向が増大しているのに気づきます。信者の最も尊ぶものが嘲られ、嘲笑されることもありまます。繰り返されるこのような差別の数々は憂慮すべき問題であり、よく考えてみる必要があります。(…)(九五・五・二二)

をも含めた(許される範囲での)典札奉仕、司牧や運営上の問題を扱う評議会、教区会議、種々の教会付属施設などに広げ得るのです。種々の司牧活動も然りです。特に司祭の手が足りない教区では(司祭に固有の職務を除き)新しい形の教区運営への参加が期待されます。教会の各方面で女性の才能が十二分に発揮されれば、どんなにすばらしいことでしょう。」

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説しながら、そのまま伝える月刊紙。毎月十日発行。定価 一部八十円、送料実費。一年予約九百円、送料七百円。千部以上の一括購入なら送料不要。

郵便振替 01130-8-72393